依上保内山田村内西とりきよ　分錢七貫文

右寄進狀如件

永享二年正月十一日　氏朝

〔東遊雜記二〕十一日、〇天明八年五月白川城下止宿也、御城主は松平越中守君、十一万石市中千軒ばかり、御城をくるゝと取まわせし町なり、城は平城にして、大手からめ手の門前を往來の道として通行す、さかれども御門計見へて、御城は見えず、町の中へ流れを取て町わりをせし所なり、上方中國筋の城下と違ひて、町家見ぐるしすべて此邊は諸品不自由にて、海魚至て稀也、人物言語も劣り、民家の家造りあし、〇略中白川城下より棚倉へ六里、三春へ十二里、二本松へ十五里八丁、郡山へ九里、若松へ十九里〇略中十四日、福良二里半餘原驛三里餘若松城下止宿、〇略中原の驛より若松への街道山道にて、〇略中坂の頂より若松の郷中を眼下に見る所あり、平地凡方五里もあらんとおもふ地なり、若松の城市中見ゆる町家草ぶきにて、瓦葺は稀にあり、寒氣強き所ゆへに瓦はよわしといふ、〇略中此所昔時蘆名黨の古城跡にて、其後上杉家、蒲生氏居城ありしより、會津侯の御知行の御城下ながら、備前岡山の城下などに見くらぶれば大に劣れり、婦人の容體殊にいやし、若松より二本松は寅に當りて十三里、西方越後の國界へ廿一里、北の方羽州米澤へ十四里、〇略下

〔東遊雜記四〕六月〇天明八年二日板倉内膳正三万石御在所福島止宿、此所は阿武隈川、町の後へ流れて、諸方への往來自由にて、交易の便りよきゆへに、町屋並も大概よく、近郷の田畑もひらけ、よき風土也、吾妻が嶽の麓は大に入組て、田沼龍助君の御知行も、七千石此所にて給りしなり、

〔東遊雜記十一〕弘前は、津輕越中守侯の御城地、四万六千石、市中三千餘軒、大概の町なり、城は山城にして要害いかならんや、委しく見へず、家中町も御知行不相應に多しとの物語り也、武家の男女貴賤となく、御巡見使を見物に出しを見るに、人は武士にて、人物衣服髪の結やうまでも、あし